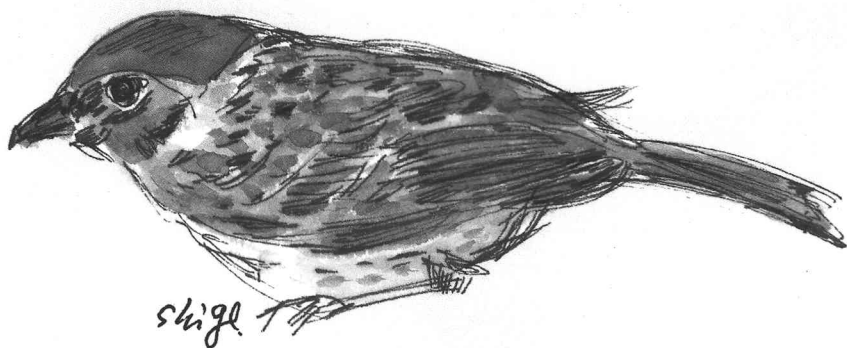


季刊 連句 第6号



季刊連句 第6号 目次

最初の翁塚（南柏雑記4）	1
『付方自他伝』注解（上） 東 明 雅	2
『酔ひどれ歌仙』評—現代連句の基礎— 馬 場 東 夷	7
梅雨入 四吟 (文)杉 内 徒 司	10
青水無月 捌 東 明 雅 (文)伊 藤 敬 子	12
絶頂の城 付勝練習歌仙	14
南柏の花 式 田 和 子	6
ななかまど 捌 東 明 雅	20
第九回猫蓑会 四歌仙	16
真昼の花 東 明 雅 捌 ... 16	桃の花 馬場東夷捌 ... 16
木の芽 福 井 隆 秀 捌 ... 17	花吹雪 歌川和代捌 ... 17
第十回猫蓑会 四歌仙	
夏燕 穴 沢 篤 子 捌 ... 18	梅雨明け 米谷貞子捌 ... 18
虹二重 内 田 麻 子 捌 ... 19	百日紅 式田和子捌 ... 19
雁帛往来 21	連句会案内 21

表 紙 （ 雀 ） 岩 満 重 孝

最初の翁塚

南 柏 雜 記 4

六月二十日、富山に住む娘の案内で、近くの井波の町を訪れた。井波は欄間工芸の町として、また本願寺別院瑞泉寺のある町として有名である。町中に入るとすぐ欄間を作る店が目についた。みな、通りに面したところが仕事場となっていて、若い職人も多く、盛んに鑿を振っては、松・竹・梅・竜・虎などの模様を刻んでいる。それが殆んど軒毎に続いているのは珍しかった。この欄間工芸が井波の地場産業となったのは、瑞泉寺が建てられ、京都から職人を招いた時、その伝統が残ったものとのことであるが、それだけ井波の町に大きな影響を与えた瑞泉寺は、流石に宏壮・華麗で、びっくりさせられた。城郭を思わせる石垣の中に建つ大伽藍には、すべて華麗な彫刻が施され、見る者の心を奪う。北陸の一向宗の力強さを目のあたり見せられた思いであった。

この瑞泉寺の十一代応真院晴寛が、浪化と号して俳諧を

嗜んだ事もよく知られている。元禄七年（一六九四）京都嵯峨の落柿舎で初めて芭蕉に対面し、師弟かための盃を交わしたが、その年十月十二日芭蕉は大阪で没し、浪化は大変悲しんで、元禄十三年、芭蕉七回忌に近江の義仲寺の墓に詣で、墓の下にあった小石三個を拾い持ち帰って、浄土宗浄蓮寺の墓地に方三尺の塚を築いた。浄蓮寺は浪化が井波の俳諧の月並道場としていたところであるが、文化七年（一八一〇）、ここに黒髪庵という庵が作られ、翁塚も嘉永七年（一八五四）、この黒髪庵内に移築されたという。

私どもは町役場で聞いて瑞泉寺に向う途中、黒髪庵の標示を見つけて入った。浄蓮寺の一隅に黒髪庵は茅ぶきの簡素なたたずまいを見せ、せまい庭には楠の大樹の若葉が折からの雨に濡れて美しかった。その下に翁塚がある。卵塔に翁塚と記しただけの小さなものであったが、その台座に「是本邦翁塚之始也矣」と彫つてあるのが珍しく、おもしろかった。芭蕉句碑・翁塚は全国に何百あるか何千あるか、ともかく夥しいが、これは「元禄十三年七月」というから、正しく、翁塚第一号であろう。これにより浪化の芭蕉心酔の度がさらにうかがわれるとともに、その人柄の一端が分かるような気もした。

『付方自他伝』注解(上)

東 明 雅

「歌仙は三十六歩、一步も後に帰る心なし」(三冊子)とは連句芸術の核心を衝いた言葉で、一卷全体にわたって、この心構えが必要であるが、これを具体的に見ると、まず、付句が打越(前句の一句前の句)に戻らぬように心がけねばならない。これを三句の運び・三句のはなれ・三句の沙汰、あるいは単に三句とも言い、その三句目である付句が打越と同意・同想になるのを、連歌の時代から輪廻・観音開き・扉などと呼んで、第一の禁忌とした。

連歌の時代に、体・用の区別がきびしく説かれたのも、この輪廻になることを防ぐ手段の一つだったのである。俳諧では殊に山類・水辺・居所などの句には体と用との区別があり、たとえば海・浦などは体、浪・氷は用というように、本体的なものと、作用・属性的なものとを区別し、これを付合に應用して、体用のあるものは三句続けるべきであるが、その際、輪廻をさける意味で、用・体・用、あるいは体・用・体という続け方は禁じられていた。

この式目は俳諧の初期にはかなりきびしく守られたが、

貞徳の晩年(承応二年一六五三没)ごろからは次第に消滅して行く。それは体・用の分け方に曖昧なものが存在したのと、だんだん、俳諧にも山類・水辺・居所などというものよりも、より人間的なものに注目し、人間の生活や感情を詠むのが中心になって来たせいであろう。談林の俳諧は正しくそれである。

しかし、同じ俳諧で人間の生活や感情を中心に詠むということになっても、そのことの中で輪廻が起る可能性がある。蕉門の俳諧になつてくると、人情自(自分のこと)自分の行動・感情・思考等を主観的に述べた句)と人情他(他人のこと。他人の行動・感情・思考等を客観的に述べた句)ならびに人情なし(場の句ともいう。純粹な叙景句)との意識が目覚め、芭蕉の作品にもこれを指摘することができ、この自・他・場の組み合わせに、連歌の体・用の組み合わせを應用して、輪廻にならぬよう、最も簡潔に合理的にまとめたのが、元禄五年(一六九二)の跋をもつ立花北枝(享保二年一七一八没)の「付方自他伝」で

あつた。

元禄二年（一六八九）年、「おくのほそ道」の旅に出た芭蕉は、羽黒から象瀉に遊び、北陸道を西にたどって、七月加賀の金沢に入った。この地で芭蕉は北枝と対面し、やがて北枝を伴って小松から山中温泉に杖を曳いた。北枝の俳論書「山中問答」は、この山中温泉における芭蕉の俳談を書き記したもので、「付方自他伝」は「山中問答」の附録のような形となっている。「付方自他伝」の跋に「右自他の伝は、三年の工夫をもって、蕉翁に見せ申候処の一法也」。「仮初に他見を赦さず。熱心の人に相伝ふべき。多くは秘べし。」として、「元禄五年春鳥翠台北枝判」の署名があるのは、この元禄二年から三ヶ年の工夫でこの「付方自他伝」を案じ出して芭蕉に見せたことであろう。

芭蕉がそれに対して、どのような返答をしたかもはっきりしないし、また、元禄五年後の芭蕉の作品を見ても、顕著な影響は見られない。その上、この「付方自他伝」は北枝系の俳諧師の間では伝書として尊重されて来たものの、印刷され出版されたのはそれから百年あまりも経ってからのことなので、あまり一般には知られず、現代の連句においても、これを尊重するのは伊勢派（北枝系）の伝統を襲ぐ一門に限られ、あとは全然これを知らぬか、無視するからである。

尤も「付方自他伝」さえ守っておれば、一卷の輪廻の心配は全く存在しないというわけではない。「二弟準繩」（安永二年一七七三刊）にいうように、打越・付句との間に

は、自他の外に、虚実・多少・体用・気質などの変化も考へなければならぬことは事実であるが、何分にも自・他・場の関係は、一卷の地となるものであるから、これを無視しては輪廻を避けることは難しい。だから、平俗なりとして美濃派・伊勢派の俳諧をおとしめた蕪村も、この自他の法を取り入れて俳諧を作っており、蕪村の愛弟子几童はその名著「付合手引蔓」に、わざわざ取り上げて「付方自他伝」を説明している。また中興俳人の一人白雄もその著「寂葉」の中で、くわしくこの「付方自他伝」を補説していることは後に述べる通りである。

俳諧は確かに芭蕉によって芸術的に完成された。芭蕉が「付方自他伝」を使わずにあれだけのすばらしい作品を示したのであるから、何も「付方自他伝」を知り用いる必要はないと人は言うかも知れない。しかしながら、芭蕉は不世出の天才であったことを思い返す必要があろう。また、天才芭蕉の作品も決して万全ではなく、自・他・場の輪廻の観点から見ると案外傷のある巻も多い。だから、自らを芭蕉以上の天才と思う人は別として、一卷の地に変化をもたせ、「歌仙は三十六歩、一步も後に帰る心なし」という作品を目指す人は、よくこの「付方自他伝」を味読し、体得すべきであろう。

ただ、「付方自他伝」は原文・例句にやや分かりにくいところがないでもない。それで、以下「付方自他伝」の例証を全部示し、簡単な註と説明を加えることにする。

「付方自他伝」（一名「付方八方自他伝」ということも

ある。その下に「他見無用、不可換千金也」とあるのは、跋文に「仮初に他見を赦さず」とあるのと同じで、いくらお金を積まれても然るべき人の外には見せるな、伝えるなというわけであるが、「執心の人に相伝ふべき」とあるので、俳諧修行に極めて熱心な人に限っては、この教えを伝授してもよいというわけである。

(1) (打越) 硯に向ひすだれ揚げつつ (自)

(前句) 梨の花咲揃うたる夕小雨 (場)

(付句) 雉子におどろく女一むれ (他)

このように中の句(前句)が人情のない句(純粹な叙景句・人間の姿がどこにもあらわれない句・場の句という)である時に、打越が自の句(自分の行動・感情・思考等を述べた句)である場合には、付句には他の句(他人の行動・感情・思考などを客観的に述べた句)で付けるように、自と他をふり分けて付けなければならない。即ち、一方では硯に向い簾を揚げて、その庭前に梨の花が咲き夕小雨が降っているのを見る自分を描き、他方では同じ庭前に梨の花が咲き夕小雨が降っているが、その時通りかかった女一群が鋭い雉子の鳴声にびっくりした外の景を取り合わせ、これによって気分、情景ともに変化を示し、輪廻に落ちるのを避けることになる。

それは例えは

(打越) 硯に向ひすだれ揚げつつ (自)
(前句) 梨の花咲揃うたる夕小雨 (場)
(付句) 薬のなすむ弥生つれなき (自)

として見た場合、梨の花に小雨の降る夕方に、一方では簾を上げ硯をする自分、他方では四月に薬になじんでいる身を嘆ずる自分が付けられ、打越と付句が前句を中にはさんで同趣・同境の感じがする。これが輪廻である。このような事のない為には、場の句(人情なしの句)をはさんで、人情の句を付ける時は、打越が自の句であつたら、付句は他を付けよというのである。

次に北枝は打越が他、前句が場である時は、付句は自を付けよと言う、前の(1)の逆である。

(2) (打越) おくり火に尼が涙やかかるらん (他)
(前句) まつかぜ遠く水の行末 (場)
(付句) さっぱりと酔のさめたる明屋敷 (自)

是も前句をはさんで打越と付句とに、他・自をふり分けて付けたものである。しかし、その先に、「但、表の句つゞき、四五句も人情なき句付たる時は、今一句延して付句は常の事也」とあるのは、誤字があるのか、どうもそのままでは理解できない。尤も、芭蕉時代の作品には、人情のない場の句が四・五句も続いた例は多い。しかし、場の句を四句も五句も続けると、やはり変化がなくなりおもしろ

くなくなる為に、中興時代あたりからは場の句は二句まで、それ以上は続けるなということが白雄の「寂菜」にも明記されている。だから、我々も場の句は二句までというように定めておるので、右の北枝の文章は無視してもよいと思う。

(3) (打越) 落瓦あらしは松にしづまりて (場)

(前句) 皆わずれたる明がたの夢 (自)

このように打越(場)・前句(自)と来た場合には、付句は場の句でさえなければ輪廻にはならない。だから、

(付句) 抱籠の手ざはりも早秋近き (自)

と、人情自の句を付けてもよいし、

(付句) 看病の粥吹廻す小くらがり (他)

と、看病の人が暗いところで粥を吹いてさましている所を出してもよい。「このように人情のない句へ、自の句を付けた場合には、其人の自の句をもう一句付けてもよいし、別に人(ここでは看病の人)を出して、自の句の人(明がたの夢を忘れた人)から見たもの、聞いたところを句に作るがよい。この外には付け方はない」と北枝は言っている。

(4) (打越) 並木あらはに松の露ちる (場)

(前句) 入月に瘦子抱たる物貰ひ (他)

と、打越が場、前句が他の場合には、付句は場の句でさえなければ輪廻にはならない。

それで、次の三通りの付け方がある。

(付句) 脇ひらも見ぬ鍛冶が勢ひ (他)

「このように他の句(乞食)に他の句(鍛冶)を向い合わせて付る時は、この二人を見ている人は別にあって、乞食と鍛冶の両方を見て作るものだ」と知るがよい。人倫という語と人情という語とは、この際区別しないのでよいが、よくよく前句が自の句か他の句かをはっきりしなければならぬ。「これは、七名八体という向付の方法である。

(付句) 顔にみだるる髪の赤がれ(他の会釈)

「是は其人(乞食)のあしらいの句である。と言っても、乞食が自分のことを髪が赤枯れているなど言うとは考えられないので、これもその乞食を見ている人が別に居て、その人の見たところを付けたものである」。会釈という言葉も広狭いろいろの意味に用いられるが、この場合は狭い意味で、前句の人の容貌とか衣服とか持物とかを取り上げて付ける、軽い付け方である。

(付句) 聖霊おくる朝は忙しき

(自)

(付句) 見よがしに桜が本の女房達

(他)

「是は物貰いを見ている人の自の句である。このように他(乞食)の句に対し、それを見ている人の句(自)を付けることを、自むかいと言う。この外には付け方はない」。

(5) (打越) あたらしき草鞋に脚のあたたまり(自)

(前句) 命なりけり洛外の春

(自)

「このように自の句(新しい草鞋を履いている)に自の句(洛外の春をよろこぶ気分)を付けた時は、その自(新しい草鞋を履いて洛外の春を楽しむ)の人に見せるか、物言はせるか、聞かせるかして、このように別に人(ここでは洛外の春を楽しむ人の目に映った女房たちの姿)を出さねばならぬ。是も自から他へ移る句法である。よくよく考えよ。この外には付け方はない」と述べている。(続)

南柏の花

式田和子

柏市の広池学園は、モラロジーを取り入れた素晴らしい教育と、十六万坪の広大

な敷地に三百本余りの桜が見事であります。同園出版部刊「れいろう」誌に連載をさせていただいているご縁で、「南柏の花」に逢うことができました。研修館

の二階からは花に真向い、連衆は雲上人ならぬ花上人の風情で連句興行をさせていただけましたこと、厚く御礼申し上げます。

南柏の花

東 明雅 捌

南柏の花に逢ひたり連句行

和 子

雨もまたよし暮れてゆく春

明 雅

団扇貼る庇の奥を灯しあて

孝 子

箱階段をかるく踏む音

正 江

書割の月のあせたり村芝居

杉 亭

秋の螢の人に親しき

杉 風

剣菱の殊によろしき新走り

徒 司

モヒカン刈りて男爽か

瑞 枝

放蕩の果舞ひ戻る妻の家

千 孝

雪となりたる北山の郷

江 孝

脱衣婆の肋あらはに真暗がり

江 孝

職退きてより寡黙なる父

司

夏の月手拭浴衣寄席帰り

和 子

鳩の抜け毛がほろほろと舞ひ

和 子

裏路地に憂ふ浮世のモラロジー

風 亭

西鶴の本読めば読むほど

同 風

印籠は古き蒔絵の八重桜

同 風

芋虫やがて美しき蝶

同 風

農具市鋤みんな光らせて

江 孝

勘定書はフアツクタスで来る

和 子

衿がみをつかみさうなる鬼の声

和 子

マイケルジャクソンばれし整形

和 子

流し目にオバングループ吐息つき

江 孝

面影ばかりよぎる青空

江 孝

石ひとつ積みて別かるる峠道

江 孝

狐撃たれしあとの静けさ

同 和

ふつつと鍋煮えたぎる囲炉裏端

和 子

口惜しき負を棋譜にたどりて

枝 司

貴種流離月にうそぶき幾年か

江 孝

橋のたもとにすだく蟋蟀

江 孝

外房の海濤立ちて雁渡し

風 亭

問はず語りの旅の合客

江 孝

電神ほこり扱へばあらはるる

江 孝

べちやべちや水をなめる三毛猫

江 孝

十六万坪の学園花吹雪

江 孝

親子のもし風船の紐

江 孝

昭和五十九年四月十九日首尾

江 孝

於南柏 広池学園

江 孝

『酔ひどれ歌仙』評

—現代連句の基礎—

馬場 東夷

夷齋石川淳、玩亭丸谷才一、結城昌治、野坂昭如、井上ひさし、杉本秀太郎、大岡信といった当代の博雅、才子の方々が張行した歌仙集『酔ひどれ歌仙』（青土社刊）が「読みごたえのある」との評判もあり、いまだ俳諧修業の日も浅く、平仄もそろわぬ笹鳴き振りの身故に、何事も修業と繕いてみた。

「市に五虎」の巻

「花鳥諷詠というのはいかにバカバカしいものであるか」という夷齋先生の言葉がこの巻全体を支配しているようだ。人情句がこの巻のほとんどを占め、人情なしの句は三十六句中にわずか五句、表六句もすべて人情句で、五句目の月から、

見わたせばピンの目ばかり田毎月

といった面白すぎる句が出て、始めから、はしやぎすぎの

様子、人情句の羅列と相俟って序破急を無視してしまっている。

発句が三夏、脇が三夏で、第三が雑となっているが、「芭蕉作品では、夏、冬が起句の時は第三まで夏、冬を続けた場合が多いので」（東明雅—季刊『連句』第2号一九頁）脇で初夏、仲夏、晩夏のいずれかに定め、第三もやはり夏の句にしたいところ。

賽をまさぐる秋さむの袖

晩秋

見わたせばピンの目ばかり田毎月

三秋

子ども相撲のみなに手拭

初秋

これは季戻りで、「歌仙は三十六歩也。一步もあとに帰る心なし」（三冊子）であれば、季戻りは「あとに帰る心」となるろう。

また、同じ場所に停滞することや後へ戻ることを避けるために定められたものに去嫌がある。

子ども相撲のみなに手拭

あやとりの川と橋から別れ来て

齒ぐきでしやぶるいかの塩辛

フルベース空の徳利をいかんせん

「相撲」と「フルベース」がスポーツの同趣向の二句去り

行列を迷子ひとりでもるくする

車をつづく町の春泥

武庫川をのぼれば花の宝塚

天子の部屋に寝たるのどけさ

「迷子」と「天子」の「子」の同字二句去りなども「あとに帰る心」になりやすい。「徳利」、「朝酒」、「酔へば」などの酒の句の繰返しも加わって巻全体を一本調子としている。この巻のように「人事がテキパキ移ってゆく」と一本調子になるようである。この巻から「芭蕉のえらさ」はまるでわからない。

五匹の虎が文台の上ではしやぎまわった「はしやぎすぎの巻」。

「旅衣」の巻

この巻では、表六句では控えた方が好ましい人名、地名があり、ここでも序破急の無視になりかねない。

第三 物ぐさの太郎が垣根繕ひて

五句 武蔵野に野干たはむる三日の月

五句目は秋となっているが、「野干」は狐故、この月は冬の月ではなからうか。

ウ八句 さこそ忍者と落葉ふみゆく

九句 葡萄酒を抜いたとたんの詩十篇

この両句、秋の句となっているが、「落葉」を現行の歳時記に反して秋と定めて特に意味があるのだからか。時季を選ばずワインを抜く昨今では、「葉草」が秋に扱おうとも、「葡萄酒」だけで秋とすることは無理だろう。今日では「葡萄酒の新酒」は冬としたい。フランスのワインの新走りボジョレー・ヌーボーの出荷が十一月十五日、日本でこの「葡萄酒の新酒」の栓を抜けるのは冬なのである。

いざゆかむ遠き千里は花ぶゞき

思ひがけない春の絵はがき

人質は脱け出た塔の冴えかへる

ここも季戻りである。

ウラとナゴリに数字の打越もみられる。

葡萄酒を抜いたとたんの詩十編

醒むれば渴く長江の水

いざゆかむ遠き千里は花ぶゞき

「十」と「千」の打越

千代にことほぐ紅白の菓子

そろばんのとれぬところは運まかせ

万金丹も痰の妙薬

「千」と「万」の打越
とにもかくにも季の問題に悩まされる「季疲れの巻」。

「雨の枝」の巻

この巻は俳諧でもっとも嫌われる観音開き（輪廻）が多く、例えば、
初あらし行人の影飛び散りて
芦辺に鷺の羽づくろひする
誰かたたく庄屋の門を今日の月

素知らぬ顔で燕飛びゆく
天と地を一枝につなぐ峰の花
やまともろこし春の賑ひ

ぬめりよき硯談じる夕まぐれ
小杜びいきのままで還曆
新そばと聞いて食ひけは衰へず

宝の島はいづこなるらん
うらうらと霞の涯のジパングや
富士もくすりと笑ふ三月

富士もくすりと笑ふ三月
四海みな敵か知らねど花の春
里をめぐつてうぐいすの鳴く

以上の如く、三十六歩一歩前進二歩後退ということになる。『六道輪廻の巻』。

運座の方々は気前よく心付をはずまれるので、各歌仙とも蕉風というよりも談林調となっている。

夷齋先生の『俳諧初心』に「初学俳諧に入るの道は他なし、まづ適宜に逆上して、毎晩人知れず、芭蕉全集を茫とするほど暗誦することだ。第一に俳諧の連歌の巻、第二に旅行記、この二つを反覆朗吟する」とあるが、そのさきがこの「酔ひどれ歌仙」となるのであろうか。

芭蕉の式目に対する態度は「成ほど用てなづみ給はず。思ふ所有時は古式を破給ふ事も有。去ども私には破らるゝは稀也」（三冊子）ということであり、芭蕉は勝手気儘に式目を破ったのではなく、古式を充分咀嚼したうえで、臨機応変に処したので、これこそ芭蕉の天才であらう。天才ならぬ私ども凡俗の徒は身の程を弁えて、序破急、季戻り、去嫌、輪廻といった連句の基礎を身に付け、蕉風を現代に活かす新しい式目をめざすべきであらう。

梅雨入 四吟

坪庭に木賊の青き梅雨入かな
きつめの帯にはさむ小扇
鴨涼し池を廻りておもむろに
男三人静かなりけり
月浴びし硯に山河浮び来て
膾にせむと湯がきたる菊^ウ
名を問ひし馬上杯なる新作り
齡のわりには若き顔立ち
ハンカチをひろげて折りて膝の上
葛籠の底に母の恋文
懺悔する床の木椅子の寒々と
二重スパイの転々の生
ポリショイの赤き緞帳重く垂れ
夏の月夜も更けて壽音
風倒木調べ疲れし北の町
何かと事の多かりし年
太郎冠者花見に行かむ瓢持て
鐘も霞みて遠き嶺々

時正明徒

彦江 雅司 彦江 司雅 彦江 雅司 彦江 司雅 彦江

杉内徒司

湯島に住む秋元さんの新築の家の四階には
羅浮亭という茶室がある。

この茶室で、庭の木賊を詠まれた発句にい
つもの気心の知れた仲間が、唱和して歌仙一
巻首尾。

「羅」「浮」とはともに山の名である。中国
広東市の南方に羅山、浮山という二つの山が
あり、羅浮とは羅山・浮山の二山の総称であ
る。山麓は古来より梅の名所として名高い。
唐時代の詩人柳宗元に「趙師雄醉憩梅花」
という詩がある。詩の意は、

隋の趙師雄がここで酔ってうつつらうつら
として夢を見た。それは、日暮れに酒屋で
休んでいると、薄化粧の芳香を放つ美女が
出てきて、意気投合して共に飲んだ。緑衣

ナオ
独り来て壬生念仏の中にあり

竜馬を偲ぶ伏見寺田屋

風呂敷の隅より枇杷の実ころげ出す

ちんちんちんと鳴れる踏切

いつの間に迷路に入りし思ひ事

人魚の腫涙いっぱい

抱きしめて又だきしめてだきしめて

埃かぶりし皮蛋の壺

鬱病の老いたる猫をもてあまし

月に刻めば仏あらはる

みの虫の風のまにまに身をまかせ

秋深ければ死んでゆくなり

俳諧は頓智頓作情無情

競馬競輪ゴルフカラオケ

小机の文箱の蓋を明けしまま

藍を抜きたる藍の型染

佐保姫の恵みの花の咲きみちて

春の雲見る羅浮亭の窓

昭和五十九年六月十四日首尾

於東都文京区湯島羅浮亭

連衆

草間時彦

秋元正江

東明雅

杉内徒司

雅

司

江

彦

司

雅

彦

江

彦

司

江

彦

司

雅

彦

江

雅

司

草間時彦

秋元正江

東明雅

杉内徒司

の小童子も加わり、大いに歌い、笑い、よろこびをつくして別れた。気がついたときは、風雨が起こり、東は白み、白分は梅の大樹の下におり、美女は梅花の精であった。

これから、「羅浮郷」「羅浮の梅」「羅浮の夢」という故事がうまれた。

秋元家が東都の梅の名所、湯島にあるからこの名がつけられたという。

羅浮亭という名は実は此の日きまったのである。明雅先生が選ばれた四、五の名のなかから、時彦氏が今席上決めたのだ。よって私が挙句に使わせていただいた。

終つて今日の記念にと乞われた時彦氏は二枚の色紙に次の句をかかれた

羅浮亭の木賊の青き梅雨入かな

竹の穂に風すこしあり夏茶碗

それから席をかへて不忍池畔「鳥巣」に移る。

もろもろの話が弾むうち、

裸婦亭にあらず羅浮亭梅月夜 時彦

を立句とした「賦酒恋歌仙」がお銚子八本

が空になる頃首尾したのであった。

青水無月 東明雅 捌

伊藤敬子

おもかげの上野の鐘や青水無月

雨に色増すあぢさゐの花

松の風仕立上りの浴衣着て

手習ひの筆洗ひ納めぬ

客人を迎へて月の窓に付ち

木深きところ秋蟬の啼く

遠近に仕掛けられたる下り築

そそく紅茶の湯気のかすかに

高山寺鳥獸戯画を見し日より

日毎の文を書きくれし人

預けたる掌のぬくもりを持ち帰る

銀杏落葉の外苑の径

旧町名「吉原」といふ冬の月

なにかと云へばけちつける奴

座にひとり灰皿かくす愛煙家

剥げし根来の卓によりぬて

錦絵の名所たずねて花の昼

春の女神のすすする美酒

敬子 明雅 彬風 正雄 隆子 みや子 徒司 正江 江雄 隆風 風司 隆風 敬司

東明雅先生に連句の御指導を頂いたのは、去る五月六日。俳人協会愛知県支部の大会で御講演のあと「歌仙を巻きましょう」との仰せをお受けして、名古屋に於て明治以後はじめての歌仙「夏燕の巻」となったことは、まことに歴史的意義も大きく、深い感激であった。

およそ二ヶ月後の六月二十九日、こんどは先生の御薫陶を受けていられる東京の錚々たる連衆に加つて、上野韻松亭で再び「青水無月の巻」の歌仙を巻くという光栄と幸運に恵まれたことは偏に、東明雅先生の御高配と御厚情によるもので、感激と緊張感で身のひきしまる思いであった。

会場の韻松亭はかつてホトトギス全盛期のころ、武蔵野探勝会の会場としても使われたところで感激一入であった。私その他「笹」の二人和久田隆子さん晏椰みや子さんも名古屋から到着。

湯島にお住ひの秋元正江様より、会場から眺められる風物や景色の歴史的現在にわたつての行き届いたご説明があった。高台にあって見晴しもよく、うっそうと茂った樹木の向

ナオ

永き日の流れのままに笹小舟

身は竹斎と名乗る旅びと

山茶花のほろほろこぼれ靴の音

冬鴉の声脳天に聴く

禪僧の作務の終りの竹箒

リネンのパンツ覗く生垣

療養の胸に燃えきし恋心

現れし猫躰口から

大津絵の鬼の金棒朱がにじみ

根岸の雨に秋袷濡れ

無月にてひとり欠けたるクラス会

ナウ

長き眉毛のそぞろ寒なる

猿酒を三宝にのせしんがりに

シャッターチャンス待って木の上

遊歩道幼き声の弾むまま

宮の渡しの夕霞して

今日無事に終りて花の吹雪かな

青磁の皿にのせる若鮎

昭和五十九年六月二十九日首尾

於韻松亭

雄風 敬同 敬み 敬雄 司江 江み 江雄 江風 隆み 雅隆

うに不忍池が見える。真正面は湯島、右手に
東京大学が見える。濡れ縁から手の届くところ
に紫陽花の大蔕が梅雨にぬれ、あけび棚か
ら見透される空を幾種類かの鳥が行き交ひ、
声を落す。部屋の壁には日本画や名筆が掲げ
られ申し分のない雰囲気である。

先づ東先生から、「発句をお出し下さい」
とお声がかかった。『去来抄』の中で芭蕉の
ことばに発句をどうぞといわれたときは間髪
を入れずに出すのが参じたものの礼儀であ
る、とあったことを思い出し

おもかげの鐘の上野や青水無月
を出させて頂いた。

賑やかになったところで昼食の見事な御馳
走を頂こうとしたとき、九つの鐘が鳴り響い
た。発句の鐘が証明されて、安堵した。ピー
ルの酔も加って次々と展開してゆくさまに
「座」のよろしさを満喫した。

花の座は僭越ながら私が頂いたが、先生は
発句と花を貰えば十分ですよといわれ、私は
連句の意味にはたと思いが当った。

四時半過ぎ不忍池畔を一同で巡り、宝物の
一つをふやした満足感に浸りながら東京駅へ
向った。

絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切
10月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鷺のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

噺る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

六句目

治定 1 新聞少年やや寒の道

次位 2 地芝居はねし人のざはめき

佳作 3 野分の名残り雲の一刷毛

4 牧を閉ぢたる高原の村

5 秋冷いたる山荘の庭

6 色なき風の吹き過ぎる庭

7 声高々と夜学子の群

8 小石まぎれに落ちる無患子

9 蓮の実飛んでくらし水面

10 最終電車色のなき風

11 そぞろ寒として丸まりし猫

12 出水の下町離れぬ粹人

13 秋興つくす遠来の客

14 ひそかに熟す苑の栗の実

美	千	彬	東	正	孝	明	一	杉	樗	貞	た	隆	東	樗	正	蕪
保	町	風	遊	夷	江	子	青	力	亭	晴	か	秀	夷	晴	江	村

☆んどの句が叶っていたが、21は何かの錯覚で季語を忘れられたのであろう。さらに、この表の句の留まりは、てには留めが多いので、体言留めの方が望ましい。しかし、これも絶対ではない。さらに、夏鷺のこだまする声が出てくるから、25・26・31などはまずいであろう。そのような点を参考にして決めたわけであるが、治定の句は、新聞少年とはっきり主語を出しているのもよく、外の景であり、名詞留めでもあり、第一、題材が現代的であり、前句との付味、打越よりの変化も十分であった。

2の句、地芝居のはねた感じは1よりもむしろ付味がよい位であるが、「ざはめき」が音の感じがするのがやや気になった。その点は7も全く同様である。3は場の句、野分のあとの空模様を描いたまでの句だが、表現に曲があり、付味、変化ともに上々である。4と5とは似たような景で、抄らぬ稿を書いている人の其場の付けである。それぞれに風情があり、十分付いている。

其場の付けと言えば、6・7・8・9・14・15・16・27なども同じく其場の付けであり、それぞれにおもしろかったが、一般に言って、打越からの気分が十分に転じていない憾みがある。

10は秋風の中を行く最終電車を見た景か、場の句と見れば付味もよく変化もある。12は誰かの面影付であろうが、私には分からない。13は「秋興つくす」という語がどうも抽象的で具体的なイメージが湧かない。11と20に猫が出て来ている。「鷺や蚊帳のあとで猫はいけませんか」という

15 有明かし消え流れゆく霧
16 沓脱石の下駄に薄霜

17 草翳深き邯鄲の闇

18 どこ吹く風のえんま蟋蟀

19 赤松林鹿の逃げゆく

20 しばらく猫は胡桃転がす

21 又も烈しく犬の遠吠

22 秋袷着て膝のしとやか

23 鮭帰り来る故里の河

24 朽ちし土塀にいとど髭ふる

25 長方形のビルに鳴く虫

26 たまゆらのごとリリ・リリと虫

27 垣の朝顔いろのまばらに

28 りんご娘のもき来せはしく

29 秋貫き走る尾燈いくつか

30 目鼻流れて遠案山子あり

31 いつまでも鳴くえんま蟋蟀

32 添水夜通し石を叩けり

啓世

和子

天留子

哲

淳子

みき

正雄

てるよ

誠一

隆秀

あかり

蓼艸

みづゑ

さとし

瑞枝

あかり

麻子

黄夜

おたずねが来ているが、もちろん、鶯（あるいは蚊）と猫とは、同じ生類であっても、一方は鳥（虫）他は四足の獣で、異生類であるから、打越にあってよいということに芭蕉の作品でもなっている。

ことに11の猫は、付味もよく、転じもおもしろい。

19は鹿である。猫も四足鹿も四足だから、ここで鹿を出すのは結構である。しかし、付味がいかかであるうか。打越よりの変化は十分であるが、17・18の邯鄲とえんま蟋蟀は、両方ともに声は表面には出ていないが、もともと鳴く虫ゆえ、脇の夏鶯の声とダブル感じが消えない。その点、24のいとどなら、鳴かぬ虫であるから、無難である。

22・28は若い女性のイメージがあつて、恋の呼び出しにもなりかねない。23の鮭も異生類であるから、出してかまわないけれども、脇句と句の形が似ている上、一方が溪、他が河であるのも何か気になるところである。29は高いマンションから都の夜の大路を見おろすと、無数の紅い尾燈が詩情をそそる。原稿の抄らぬまま、それらをじっと見ているというのであろうが、何としても「秋貫き走る」という表現が無理であらう。30・32これも其場の付けであり、付味・変化ともに上々であるが、32はその響きが気になる。

次はウラの折立、長句で人情他か場の句。秋の季語をつける時季戻りしないよう。ウラになったから、神祇・釈教・恋・無常・地名・人名何でも許される。ふるって御応募下さい。

この折端の句は、前句と打越がともに人情自の句であるから、人情他の句か、場の句（人情なし）で付けるべきである。この点は応募句全部がそれに叶っていた。内外の関係から見ると、大打越の枕蚊帳以来、三句にわたって室内の景が続いているので、今度は外の句がよいと思われるが、これは絶対ではない。次に前句が秋句であり、月は三秋であるから、次は秋の季語なら何でもよい。これも殆☆

第九回猫薨会四歌仙

(昭和五十九年四月十八日)
於東京都文京区松声閣

真昼の花 東明雅 捌

議事堂を右往左往の陳情書
ビルの谷間に將門の塚

しづもれる真昼の花や神田川

待ち合はず場所間違へて会ひそびれ

上衣脱ぎたる惜春の人

チャンスは一度神の前髪

白き蝶翺びゆく方を眺めぬて

葛の葉のためしを今にたづね来よ

ひざに置きたる読みかけの本

我中空に狂う月影

借景の山の端今し月昇り

片隅に小さく唱ふ鉦たたき

菊の膾をつくる厨辺

秋刀魚を焼いて路地の家々

濁酒貧乏徳利ゆらし来る

つつましく日々好日と生きて来し

くり返し聞く古きシャンソン

瓶に挿したる百合の大輪

頭文字からみ合せて刺繡し

コーヒーを入れて昔を偲び合ひ

水色淡き絹の手巾

明治大正遠くなりたり

螢籠もちて戻りし友若き

一斉に動き出したるフラミンゴ

桜桃忌また雨仕度にて

のぼりゆきたる空の風船

武蔵野の白鳳仏のおはす寺

ちらちらと散りやまぬ花夢の中

五右衛門風呂の焚きましをさせ

山の畑に桑を植ゑをく

鮒来て振り返りつつじつと見る

桃の花

なんじやもんぢやばは裸木となり

馬場東夷

月出でて梅はほのかに匂ひ立つ

桃の花足取り軽く集ひけり

籠に盛る貽貝馬鹿貝烏貝

くるくる廻る春の絵日傘

阿呆と呼ばれ男ありけり

白子千市場の皿に盛りらるゝて

和子

西空に蛾眉のかかりて時止る

世

窓を明け雲にかくれし月を待つ

思ひ思ひに柿をむきをる

鈴虫の中の一匹かすれごゑ

たんすの奥に恋文の束

御所解きの帯をぎゆつと締めてくれ

夜はひんやり重くなる髪

銀幕の女王となりて脱税す

精神病院遂にあばかる

冬の川ゆがみて映る月の影

「しぼりたて」待つ湯豆腐の席

末つ子の無口勝ちなる変声期

呼びしインコの掌の中に寝る

足許に花びら小さく渦巻きて

彼岸参りの道にこんがら

暮遅し電柱にまだある工夫

シラカンスに似たる口元

東をぐつとにらみし兵馬備

降らぬと云ひし予報外れて

冷房を出でて暑さにはつとする

手編み腹巻ちぢみダボシヤツ

混浴に慌てとるものとりあへず

嫁けずぢやなくて嫁かず後家なの

ポスターの「恋路」いちまい能登半島

紙垂を剪るのが生業の翁

世

和

遊

よ

和

遊

よ

和

遊

よ

遊

和

遊

和

遊

世

和

遊

世

和

遊

世

和

遊

コスモスを背にカメラ向けられ

落鮎を焼きつ厨で味噌をすり

詩吟朗々お隣の客

六十年安保の人も年老いて

猫の仔のゐる縁側の端

読みもせぬ本に囲まれ花の雨

チョット来い来い小綬鶏に寛め

こんがら・矜羯羅童子

(不動明王八大童子の第七)

木の芽 福井隆秀 捌

鏡ひたつ木の芽のごとく生きんとす

はや土出でし春の筭

磯遊び隣どちみな打ち連れて

検針の男犬に吠えらる

煙突に煙とだへてのぼる月

籠いっぱいホップ詰めこむ

突き出しは蝗にかぎる信濃酒

ふるさとよりの便りなつかし

髪おろしたる身が深夜長電話

消すに消せない思ひあふるる

バージンと偽って出るコンテスト

声援の客浴衣がけなり

汗かきて走る一群れ月の坂

寿命のことは神にあづけむ

遊

和

同

同

よ

夷

世

隆秀

弘子

甲子郎

麻子

徒司

麻司

司

司

弘司

麻弘

郎

司

麻

手つかずに置かれしままの葉箱

児孫揃うて祝ふ記念日

待ちかねし今年の花もやうやくに

美術館にも届く囀り

照れ臭く名前をいひて入学す

山中湖にて若き溺るる

水脈白く曳きて帰港の船ひとつ

空曇ずらり並ぶ枕辺

三の酉迎え夜の町賑やかに

こころあたりか一葉の家

黒タイツ網のタイツに夢うつつ

しのび逢へるはいつのことやら

岬マコ妻にしたると「フォーカス」に

創刊ラツシユ多き女性誌

残業に続く残業夜半の月

木犀の香をまといつつ来る

柿吊るす村の土蔵のなまこ壁

詩吟佳境に連句四席

じわじわと中曽根おつむ破れすだけ

オリンピックもあと僅かにて

花の梢仰ぎ仰ぎて波止場まで

労働祭のどよめきの道

花吹雪人許すこと知り初めぬ

弘

郎

同

弘

司

郎

麻

司

郎

麻

弘

麻

司

弘

同

郎

麻

司

郎

秀

弘

麗ら佇む昔の石橋

仔をじやらず母猫の喉やはらかに

隣りでたぎるサイフォン之音

家苞を持ち帰るさの夜半の月

秋の袷の似合ふ着流し

一匹の塩辛蜻蛉肩にのせ

万葉歌碑の恋の歌よむ

筒井筒幼きえくぼ忘れかね

場末にゐると噂聞く君

ロブノール砂にさまよふ湖なりと

石仏目覚むシンセサイザー

寒天を晒す軒端に仰ぐ月

根まがり竹の箒を求めて

川べりの料亭はつむ同窓会

笑ひくづれて生ぬき風

神殿に匂ひそへたるライラック

シヤボンの玉の門を出て行く

相続か贈与税かともめてをり

ゲートボールの約束は反古

戦争はいやだと言ふに両巨頭

手作りクツキーパーター少なめ

マンションのテラスに見染む洗ひ髪

親の許さぬ仲は駆け落ち

名も知らず所も知らず命燃え

しきの古びし離れ屋の縁

彬風

瑞枝

久美子

杉亭

風亭

子亭

風亭

枝風

同枝

風亭

子亭

風亭

風亭

子亭

風亭

風亭

枝亭

風亭

風亭

子亭

風亭

子亭

風亭

同亭

久々の客長居して酔ひつづれ
来し方行く末愚痴にあらねど
病みし眼に月天心は眩しすぎ
蘆刈る小舟波にただよふ
百舌鳥鳴きて静まり返る里の家

枝 五目並べの兄貴おとうと
風 あこがれの美美子訪ねて尾道へ
子 お待ちどうさまうな井の松
風 花の庭絹のドレスのひるがへり
子 おたまじやくしの群れ集ふ池

保 すぐとなりまで造成地なり
一 馬方の黄昏の町戻りきて
久 魚焼く煙にすぐむせたる
子 この庭の母に捧げる花一枝
夷 挨拶かはす囁りの下

第十回猫蓑会四歌仙

(昭和五十九年七月十八日
於東京都文京区 松声閣)

夏燕 穴澤篤子 捌

水嵩のふえたる川や夏燕

篤子

おどろくほどに仕事さまざま
南禅寺切の大見得に花吹雪

保

えのころの穂のまだ稚く梅雨明けぬ

貞子

片蔭をゆく物売の声

啓世

春の日傘の忘れをかるる
夕長く自律神経乱れぎみ

夷

蝙蝠軒をかすめゆく路地
水水レモンの色に舌染めて

正江

帰省子の見違へるほど丈のびて

一青子

部厚い本のページ繰るだけ
サイフォンのキリマンジャロの沸きだしぬ

久

下駄の音外湯へ通ふ夕月夜
半ば乾きし煙草ほす竿

淳子

新蕎麦すすする行つけの店

美保

日本中の水売つてをり
天神の夜店ひやかすばかりにて

世

蚕屋障子流れに洗ふ気持よく
白き脛見ゆひとゝきの夢

喜久子

秋袷樟脳の香の匂ふひと

一

泣きぼくろ思ひだすのは艶ぼくろ
竿高々と浴衣干しゐる

保

君に捧ぐわが相聞の歌百首
若きが命断ちし踏切

遊

念入りに髻そりつひに髻おとす

世

屏風たてれば心崩れり
汽車が好き内田百間酒が好き

久

マリトルックウツソーホントかしましき
しばれる寒さ最果ての町

淳

銀行にこもる犯人夜更けまで

夷

あちらこちらにうやむやの閑
嘘ひとつかくして親と眺む月

一

懐手凭れ柱に月仰ぐ
波茶にそへて名代煎餅

江

厨辺に風呂吹大根湯気あげて

一

おたまじやくしの群れ集ふ池

久

この次はいつ来る富山の葉売り
遠慮がちなる中吉の相

司

露天の風呂に湯のあふれをり

保

鳥瓜墓の卒塔婆の新しく

世

花衣袖だゝみして厨事

喜

春の疾風の鳴らす硝子戸
吾輩は昨日生れし仔猫なり

眼つぶって聞きし明笛
産土の神に願ひの札納め

地震雷火事ボツリヌス
湾内の真珠筏に風渡る

小さな旅に汚す手巾
平凡は嫌と昼顔ひきむしり

ルオーのピエロわれら見つめて
門口にイエスを説ける女来ぬ

眠りこけたる老酒の酔
江に舟浮べ筆とる望の月

壺の松虫声も澄みゆく
さつと降りさつと去りゆく秋時雨

泣きやみし子のねだるメルヘン
人世の瓊末大した違ひなき

エンピツ噛めば良い匂ひして
斑鳩の花にかすめる塔三つ

池にたむろす尾のとれし蝸蚪

虹二重 内田麻子 捌

虹二重昨日過ぎたる恋のいろ

衣桁に久し好きな羅

金魚玉玻璃輝やけり水替へて

青年の部屋バロックの曲

明雅

江

司

淳

遊

淳

遊

同

江

遊

喜

江

遊

司

淳

江

遊

貞

喜

ひと筋の月光さしぬ欄間より

かすかに匂ふ秋の草花

雁渡る谷中に住めり寺の町

麗子と云ふ名忘れざりけり

飛箱をとぶ娘の脚のまぶしくて

宿題出来ておやつたつぶり

脇の毛を少し焦がしたかまど猫

月の湖面にかいつぶり浮く

三上山明けゆく空を眺め居り

高速道路ひたすら走る

明日よりの会議のノート読む男

カロリー制限塗りものの膳

花吹雪あびつつ句会木の下に

百年眠る蝶のひらひら

白壁の日永におどる水明り

尋ねてゆかしピカソ・セザンヌ

利き酒の舌にいつまで残り居る

ちやらんぼらんとはずむ賽銭

夕まぐれ若きは歩く寄り添ひて

疚しさ故に敢へてやさしく

生れたるままの姿を見せ合ひぬ

墓と墓との庭にまかり出

移り住み早や十年経ぬ茅舎の忌

甲子郎

彬風

町

風

り

郎

町

亥

風

郎

亥

り

同

風

町

風

り

亥

郎

町

り

風

郎

太鼓の音のひびくさわやか

お堀端さくら紅葉の散りかかり

靴をぬらせし露の小草

傾ぎたる五右衛門風呂に薪をくべ

孫も育ちて早や中学生

花の雨小さなことは忘れよと

鯨ぐもりの海はひろびろ

百日紅 式田和子 捌

連なりし屋根より白き百日紅

雨蛙鳴く昼のけだるさ

金魚玉ゆさゆさ揺らし売りに来て

頬ふくらまし飴をしやぶる子

月仄か着馴れし衣の色のごと

萩と芒を無造作に活け

生姜市風さわやかに香り立つ

目くばせをして曲る街角

るんるんといつもの時間消えるギャル

おや鳩が出た燕尾服から

ライン河くだれば古城いくつ過ぎ

波に身まかせ杯を傾く

朴歯下駄鳴らし寮歌に寒の月

維新の名残凍つる弾痕

和朱泥に中国朱泥紫の朱泥

電話の多き一日なりけり

郎

風

町

亥

郎

亥

麻

郎

和子

明雅

隆秀

孝子

天留子

弘子

李花子

同

同

留

孝

秀

同

孝

花

弘

墨堤の花に揃ひて神詣で

野だいこが出る吉原の春

四月馬鹿新人賞は夢の夢

大聖堂の鐘鳴り響き

副大統領候補はじめて女性なり

ダイエツトする肩の細りよ

ナイターの巨人連敗續の種

干しつばなしの夜濯ぎのもの

おばさまもタンクトップを着こなして

闇・闇・闇のなかで触れあふ

なむあびらうんけんそわか西拜む

手足縮めて眠る野良犬

地の果を見て来た男月の窓

宗太鯉を舟べりに釣る

秋風の吹き抜けてゆく老の身に

朝な夕なに覗くお隣り

一夜漬塩の加減に顔よせ

錦小路の人並みをわけ

花にむせ田舎なまりをついぼろり

陽炎の中ゆるるおかつば

ななかまど

文机に花ほのかなりななかまど

窓にレースを吹き返す風

ソーダ水かさせば霽真緑に

秀

雅

弘

孝

留

花

雅

孝

弘

秀

和

雅

孝

秀

雅

孝

花

弘

和

留

靴の直しの詩人なにかし

代書屋のちび鉛筆に月映ゆる

えんまこほろぎ鳴きつづく闇

八点鐘当直終へしそぞろ寒

単語カードをめぐる学生

母が居て義母居て此の頃ママも出来

「藤壺」といふ店のとまり木

欺されし真珠投ぐれば螢ゆれ

豚も暑い煙はく夜

柝の鳴りて生世話の夏の月登る

法界坊も忙し穴掘り

西空鴛一つで絵になつて

遊動円木ゆれる公園

花衣脱ぎて疲れし足伸ばす

雁風呂を焚く子と媼あり

浅蜷鳴く荒神様の棚の下

御開帳だと帰省うながし

薄髻のドラムを叩くドラ息子

セザンヌ描く横顔がこれ

煌々とワイングラスに燐火の火

抱けば解けて雪女郎消ゆ

わたしいまどこにいますか昼寢覚

おいらん草のくれなづむ白

抜けられぬ路地の奥なる赤鳥居

少しびつこの犬に好かれる

きよみ

正江

麻子

一青子

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

凡

おつきあいで恥をかかない

生活常識満載

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

式田和子著

価690円

しきたり救急箱

ニューライフ・マナー

発行所 扶桑社

〒160 東京都新宿区西新宿2の7の1

電話 03(343)2000

笹ちまき鮎もてなされ月の宴

身にしむばかり今日の顔ふれ

方違へ鳥辺山には鬼やんま

墨の濃淡ひと息に〇

猛稽古汗拭きやまぬ相撲取り

ぼつりと言つてたつたそれだけ

市中の昼の静かに花の雨

手足が生えて水を出る蝌蚪

昭和五十九年七月一日首尾

於 関口芭蕉庵連句教室

雁帛往来

▽第三回連句懇話会全国大会（六月九日・於東京芝増上寺会館）に猫藪会から参加した二組は夫々二時間で首尾したが、その一巡は右の通り。

風流の初やおくの田植うた

馬場彬風 捌

卯の花咲ける里の追分

翁

夏茶碗青き壘も馳走にて

彬風

心も和む静座黙考

美恵

燈火を消して月の出待つことに

憲助

秋元正江

遊

風流の初やおくの田植うた

翁

掬ぶ清水にきらめける日矢

正江

夏館扉もかたく鎮りて

明雅

シュークリームはあるじ好物

和子

谷戸更けて鏡のなかの月とわれ

隆秀

庭にひとむら深山里んどう

杉亭

▽「俳諧師」の肩書をつけた名刺を使う三人目の人に出合った。千社札のように俳諧師と枠付きで、しかも一寸はずに刷ってある凝った名刺を使っているのは札幌の窪田薫氏である。同氏の連句集

『ゲームの義賊』83（沖積舎刊）に「同じ漢字を繰返し使用しないこと」「観音開きを避けること」の二点をひょうぼうしてゐるのは一つの見識である。

▽暉峻康隆・宇咲冬男著『連句の楽しみ』（桐原書店刊）はお二人の文音による四歌

仙に連句入門を添へたもの。

郵便によって歌仙を巻きすすめる方法に

ついで的好参考書であり、作品の表記を現代仮名づかいとしたのは若い方々の共感を得ることになろう。

▽関口芭蕉庵「連句教室」の熱心な連衆・森玲子さんが第一句集『ルソーの獅子』（耕太画廊刊）を上梓された。

序文で川崎展宏氏の推している句。

牡丹雪坂をのぼれば熄みにけり

遙かなる海かたつむりついと落つ

鮫鱒のたうたう鍋に入りけり

秋の鳥アンリ・ルソーの獅子出るか

▽表紙の絵は前号から第八号まで同じ絵で通すことになっている。

▽「連連句会」秋山黄夜さんが句集『春木町』（牧羊社）を出されたので八月十一日

春木町育ちを残す水水
を立句にしてお祝いの歌仙を巻いた。

連句会案内

○A・C・Cゼミナール

日時 第二・四水曜午後一時―三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

新宿区西新宿二ノ六ノ一

（電）三四四―一九四一（代表）

入会金 五千元

受講料 一万一千四百円（三ヶ月）

二万二千元（六ヶ月）

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日午後一時―五時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三

（電）九四一―一二四五

季刊「連句」第六号定価五百円

誌代 年二千元（送共）

発行 昭和五十九年九月一日

編集人 杉内 徒司

発行人 東 明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二

電話〇四七―一七五―一九二

振替口座 東京 七―五二―一三三

